30.　心不全を合併したネフローゼ症候群におけるトルバプタンの有効性とアクアポリン-2の影響についての検討

越谷病院病理診断科
佐藤英一，上田善彦，山口岳彦，小野祐子，
藤井晶子，滝本寿郎，小林雅史，阿部実恵子

【目的】心不全を合併したネフローゼ症候群に対するトルバプタンの効果について retrospective に検討した.

【方法】2011 年 12 月から 2014 年 5 月までにトルバプタンを投与したネフローゼ症候群の 49 例（糖尿病腎症 40 例，微小変化群 9 例）を対象とし，尿量，理学的所見，血液尿検査所見，腎病理組織学的所見，集合管上皮細胞のアクアポリン -2 の発現を免疫組織化学により検討した.

【結果】有効例は 35 例（糖尿病腎症 26 例，微小変化群 9 例）で，糖尿病腎症有効例では BNP 値が 483.7±389.7 pg/mL から 204.6±128.6 pg/mL に有意に低下した（p＝0.03）．腎生検を施行した 16 症例（糖尿病腎症 9 例, 微小変化群 7 例）のうち，有効例（15 例）では間質尿細管傷害は軽度でアクアポリン-2 の発現は陽性を呈し，無効例（1 例）では高度の間質尿細管傷害を呈しアクアポリン-2 の発現は陰性であった.

【考察】心不全を合併したネフローゼ症候群症例ではトルバプタンの有効な場合があると考えられた．トルバプタン有効例では集合管上皮細胞でのアクアポリン-2 の発現が強くみられ，無効例では発現がみられない可能性が示唆された.

【結論】心不全を合併したネフローゼ症候群の中でも糖尿病腎症に伴う症例では水分管理が困難となる症例をしばしば経験するが，このような場合にでもトルバプタンが有効である可能性が示唆された．またアクアポリン-2 がトルバプタンの有効性を予測し得る指標となり得る可能性が示唆されたことに注目し今後も検討を行う予定である.

32.　当科における過去 5 年間の基底細胞癌の集計

皮膚科学
西川聡一，小池雅人，鈴木利宏，嶋岡弥生，
濱崎洋一郎，籏持　淳

基底細胞癌（以下 BCC）は最も罹患率の高い皮膚癌であり，転移は非常に稀であり予後にはほぼ関与しないとされているが，局所侵襲性が高いとされる．整容的問題・要望や患者の高齢化を考慮した外科的・非外科的加療を検討していくうえで，早期病変の段階で正確に検出，診断，適切な治療を行うことが望まれる.

今回我々は，当科における 2009-2013 年度の過去 5 年間の BCC 患者 177 例の性差，年齢，発症部位，臨床病型，前駆症状，受診までの期間，治療方法などを集計し，全国のデータと比較・検討を行った.

結果, 男性 104 例 / 女性 73 例で男女比は 1.4：1，全国では 1.1：1 で若干男性が多い傾向であり，ほぼ同様の結果であった．臨床病型では，結節潰瘍型が 154 例（88%）と最多であった．発症年齢は 34 歳 -95 歳で, 70 歳台が最も多く, 70 歳以上が約 6 割を占め，全国と比較すると，やや高齢に多い結果となった．前駆症状として結節，腫瘤が 44% と最多の結果となり，全国とほぼ同様の結果となった．症状自覚後 3 年以内に過半数が受診しているという結果であった．発症部位は全国と同様, 顔面が 113 例（64%）と最多となり，なかでも鼻部が計 51 例と多く，なかでも鼻翼部が 24 例と最多であった. 腫瘍径は最少で 2 mm から最大は 150 mm までで，10 mm-20 mm 未満が 66 例（37%）と最も多く，20 mm 未満が 68% と全体の約 2/3 を占めた.

2 mm 以上の切除 margin で側方断端はすべて陰性であった為，年齢・全身状態・整容的要望などを考慮した外科的加療の目安として検討に値すると考えられた．早期受診による早期診断・早期治療の原則に則り，今後も皮膚悪性腫瘍に関する啓蒙活動を引き続き行っていくことが重要であると考えられた.